

鶏 肉 情 勢

項 目			内 容			実 績											
1. 国内	(1)	生産・処理動向調査((一社)日本食鳥協会令和7年12月末実施)によると、11月の推計実績は処理羽数60,936千羽(前年比97.7%)で、前月時点の計画値から0.8%下方修正された。処理重量188.6千ﾄﾝ(同99.4%)と、前月時点の計画値から2.1%上方修正されている。産地からは、気温が下がったことで鶏の食欲が戻り、育成が順調であるという報告が多かった。増体が回復したことで処理重量が前月時点の予測を上回る見通しとなったようだ。全体的に成績良好という報告が多い一方で、大腸菌症の発生やエンテロコッカスセコロムによる脚弱等、冬場に多い疾患の発生も各地から報告があった。そのため処理重量と比較して処理羽数の減少が多かったようだ。12月は処理羽数が前年同月比98.7%、処理重量は同98.3%の見通し。また、令和8年1月は処理羽数が前年同月比100.6%、処理重量は100.7%の見込みとなっている。2月は処理羽数が前年同月比0.7%、処理重量は1.2%それぞれ減少の予測となっている。工場の人員については引き続き不足が課題となっている中、副産品(小肉・剣状軟骨など)・手羽中半割等の1.5次加工品は機械を導入し製造している産地が引き続き見られ、今後他産地にも広がっていくと予想される。	生産状況														
			単位:千羽、千ﾄﾝ、%														
2. 輸入	(1)	財務省の貿易統計によると、令和7年11月の鶏肉(原料肉)の輸入量は前月から▲14千ﾄﾝの43.1千ﾄﾝ、国別ではブラジルが前月▲13千ﾄﾝの27.8千ﾄﾝ、タイが▲1.3千ﾄﾝの14.3千ﾄﾝとなった。(独)農畜産業振興機構(ALIC)によると今後の見通しは、輸入量は12月は47.3千ﾄﾝ(前年比94.7%)、1月は47.9千ﾄﾝ(同91.5%)と12月・1月ともに減少する予測である。要因としては「輸入量は、主要輸入先であるブラジルやタイにおいて、労働者不足等により生産量が減少した影響を受けて、12月はやや、1月はかなりの程度、いずれも前年同月を下回ると予測する。なお、3カ月平均でも、前年同期をかなりの程度下回ると予測する。」とされている。	輸入動向														
			単位:千ﾄﾝ、%														
(2)	令和7年11月の鶏肉調整品の輸入量は前月から▲1.7千ﾄﾝの47.3千ﾄﾝ、国別では中国が+1.5千ﾄﾝの19.7千ﾄﾝ、タイが▲3.5千ﾄﾝの26.4千ﾄﾝとなった。																
(3)	(株)食品産業新聞社発行の畜産日報によると、11月の輸入鶏肉(モモ肉)の価格はブラジル産で530円/kgから550円/kg(前年390円/kg)、タイ産が520円/kg中心(同450円/kg)となっている。要因としては「輸入品の市中現物は依然としてひっ迫が強く、ブラジル産、タイ産ともにジリ高傾向に。外貨高と円安でこの先の調達もある程度絞られるとみられ、締まった展開が続きそう。」と報告されている。																
1. 家計消費	(1)	総務省統計局発表の家計調査報告(全国・二人以上の世帯1世帯あたり)によると、令和7年11月の生鮮肉消費(購入)は数量4,471g(前年比104.5%)、金額7,245円(同108.9%)と、数量・金額ともに前年を上回った。鶏肉は数量1,630g(同102.8%)・金額1,789円(同109.8%)・単価109.8円/100g(前年同月差+7.1円)と数量・金額・単価ともに前年を上回った。牛肉と豚肉も数量・金額ともに前年を上回った。	鶏肉の消費動向														
			単位:グラム、円、%														
2. 量販・卸	(1)	一般社団法人全国スーパーマーケット協会の販売統計調査によると、令和7年11月の食品売上高は全店ベースで前年比105.2%と前年を上回り、生鮮3部門の売上高は全店ベースで同103.9%、既存店ベースは同102.8%。畜産部門の売上高は約1,316億円で全店ベース同106.0%、既存店ベース同104.8%となった。また同社が取りまとめたスーパーマーケット景気動向調査によると、「全般的な相場高傾向が続き、一品単価が上昇、好調となった。牛肉は低調だが、豚肉・鶏肉など値ごろ商品への需要シフトが継続している。気温低下により、しゃぶしゃぶ用など鍋関連の需要も高まり、全体を牽引した。国産豚が相場高傾向にあるなか、輸入品、スライスや切り落としなどが好調に推移した。牛肉は高止まり傾向が続き、輸入牛は不振も、国産にはやや回復傾向もみられた。鶏肉は鳥インフルエンザの影響で価格高騰が続くなかでも堅調に推移した。加工肉は不調とする店舗が多かった。」と報告されている。	相場(年別・暦年)														
			単位:円														
3. 業務・加工筋	(1)	日本ハム・ソーセージ工業協同組合調べによると令和7年11月度の鶏肉加工品仕向肉量は、前年比97.2%の4.7千ﾄﾝとなった。うち国内品は同89.6%の3.5千ﾄﾝ、輸入品については同130.1%の1.2千ﾄﾝと輸入品は前年を上回ったものの、国内品は前年を下回る結果となった。	在庫状況(推定)														
			単位:千ﾄﾝ、%														
1. 令和7年11月	(1)	(独)農畜産業振興機構(ALIC)の11月末時点推定期末在庫では国産品35.2千ﾄﾝ(前年比114.4%)、輸入品121.6千ﾄﾝ(同87.3%)、合計で156.8千ﾄﾝ(同92.2%)となった。	出回り量(推定)														
			単位:千ﾄﾝ、%														
2. 見通し	(1)	(独)農畜産業振興機構(ALIC)が発表した鶏肉需給表では、11月の出回り量は国産品142.2千ﾄﾝ(前年比97.6%)、輸入品51.3千ﾄﾝ(同95.5%)、合計193.5千ﾄﾝ(同97.0%)となり、前月からは国産品・輸入品の出回り量が減少した。11月以降、「出回り量は、12月、1月ともに前年同月をわずかに上回ると予測する。期末在庫は、12月はかなりの程度、1月はかなり大きく、いずれも前年同月を下回ると予測する。なお、過去5ヶ年の同月平均との比較でも、12月はやや、1月はかなりの程度、いずれも下回る(12月:3.7%減、1月:10.7%減)と予測する。」とされている。	相場(月別)														
			単位:円、%														
1. 令和7年12月動向	(1)	令和7年12月の月平均相場は、モモ肉777円/kg(前月差+41円)・ムネ肉539円/kg(同▲6円)正肉合計で1,316円/2kgと前月差+35円、前年同月差+182円となった。(株)食品産業新聞社発行の畜産日報によると、「国産モモは凍結品を中心に引き合いが強まっている。相場も年末の最需要期に向けて上げ基調となり、日経平均で780円台まで上昇した。」「その反面、ムネの荷動きは相変わらず鈍く、相場も530円台と一段下げに。輸入品は依然として市中タイ忒感が強い。ブラジル産モモ正肉は600円超まで上昇しているものの、基本的にモノが出回らない状況。現地価格高や円安の影響で先の買付けも少ないと見られ、締まった展開が続くとみられる。」と報告されている。	鶏肉需給表														
			※参考資料:(独)農畜産業振興機構「鶏肉需給表」														
2. 見通し	(1)	(一社)日本食鳥協会による生産・処理動向調査では、12月の生産状況は入雛羽数・処理羽数・処理重量ともに前年同月比を下回る見込みとなっている。国産鶏肉相場は、12、1月の最需要期を越え、需要は落ち着く予測であるが、他畜種含め輸入状況の影響もありモモ肉の販売は順調の見込み。ムネ肉は、4月以降輸入品の国内流通もあるが、依然高止まりが続いている。前月報告した通り、引続きスペイン産豚肉の輸入全面停止、円安による輸入鶏肉の調達数量減に伴う国内流通価格の上昇、国内での鳥インフルエンザ発生の影響も考え、今後の国産鶏肉相場の動向が気になる。このような事を踏まえ今後の相場は、モモ肉は1月は800円、ムネ肉は一部原料を輸入品に代替えしている加工メーカーもあるが、スペイン産輸入豚の問題等考慮し、540円前後で推移すると予測する。	鶏肉需給表														
			※()は見通し														
(2)	令和7年シーズンの国内養鶏場・家さん農場における鳥インフルエンザは、1月13日(火)時点で16事例確認されている(採卵鶏13事例、肉用鶏3事例)。																